

「勝者のシステム 勝ち負けの前に何をなすべきか」

(平尾 誠二著 講談社 1996年初版)

著者平尾誠二氏は、日本屈指の名ラグーマンとして広く知られています。伏見工業で全国制覇、史上最年少で全日本代表に選出され、同志社大学においては大学選手権三連覇の立役者となり、その後イギリスへラグビー留学。帰国後、神戸製鋼において日本選手権7連覇を達成。選手としての活躍だけではなく、リーダーとしての立場からラグビー、スポーツ全般に提言を続け、日本人の長所と短所を踏まえた考えを発信し続けておられます。

私は監督という立場になった二年目、20代半ばでこの本と出会いました。それまで佐藤道輔先生の「甲子園の心を求めて」に始まり、東筑高校・喰田孝一先生「監督一代」、土佐高校・籠尾良雄先生「全力疾走三十年」、新潟南・関川弘夫先生「想いは熱き甲子園」…と、高校野球の指導にあたられている先生方が、自ら書かれたものを貪るように読んでいました。読めば読むほど、私自身の凝り固まった考え方、人としての器量の小ささ、観念にとらわれる傾向を感じ、苦悩していました。本書は、ラグビーの局面、展開をベースとしてももちろん書かれています。しかし、それらを野球のそれに置き換えると、実にシンプルに頭に入ってきました。後の著書でもたびたび登場してくるコーチングのあり方、チームマネジメント、日本型思考の弱点、そして発想力を持った選手の育成といったテーマが、すでに語られています。少し古い著書で恐縮ですが、若い世代の先生方には、大きなヒントを与えてくれるものと信じます。

**【第一章 次をどうすべきなのか】** 相手との勝負の前に、自チーム、さらに個の段階について熟考すべきであること。個の性格、傾向、そして集団との関係性についての考察を経て、チームの方向性を考えることを、当時の私は知りませんでした。

**【第二章 自由な発想を求めて】** 評価のあり方は、どうあるべきか。高校生としての心、生活、勉学を踏まえ、グラウンドでの評価をどうすべきか。本質という言葉が、重く響きました。いわゆる日本的思考による評価が、本質を見誤らせるということに初めて気づかされました。

**【第三章 一点差の負けは何の差なのか】** 実戦に即した練習をと標榜しつつも、またしても本質を見誤っていたと強く感じさせられた章です。日本人が好む犠牲的精神、悲壮感は、実は指導者の自己満足と強くつながるといえる言葉は、大変怖い言葉でした。選手の意識改革を求めるには、まず指導者がスタイルを変える勇気を持たなければならないと教えていただきました。

**【第四章 新しいラグビーをどう創造したか】** 基本を磨くとはどういうことか、判断力の育成はどのような局面から生まれるのか、そして厳しさはどこに求めていくものなのか。高校三年間という限られた時間のなかで、現有戦力を伸ばし戦うための展望について、ヒントをいただきました。

**【第五章 七九分間をしのいで、八〇分目で勝つ】** 強豪との戦いのなかで、どうしのぎ、勝機を見いだしていくか。それはどこを捨て、どこに力を注いでいくかともいえる。相手のリーダーの心を動かすことに、力の差を少しでも補うヒントがあることを学びました。

**【第六章 「人を生かすプレイ」が選手を伸ばす】** とかく改善点にばかり目がいきがちであった私に、長所を徹底的に伸ばすことを示してくれた章です。のちに落合博満氏が、プロに入りたいなら、攻走守をそろえるのではなく、突出した長所を持つとお話されたのと重なりました。

**【第七章 「力」以外の何かがなければ勝てない】** 何をもってミスとするのか、そしてゲームにおける指導者の立ち位置について学びました。選手が安心する信念の姿は、己の日常にあると痛感させられました。

本書のキーワード

**創造的破壊** 伝統の継承とは、古いやり方を真似し、何もしないことと同じである。これまでの自分たちのやり方に否定形をつけ、新しいものを生み出す営みが創造的破壊であること。これは、単に新しいものを求めよという意味では決してなく、常にチームのよりよき方向性を求めるためには、変える勇気がなくてはならないということと考えます。広島商・川本幸雄先生が、伝統の広商といわれるが、広商ほど創造的なチームはないとおっしゃっていたことが思い出されます。

**イン・アウト** 選手に燃えるような情熱をもって、勝利へのベクトルを作り出す一方で、冷めた客観的視点・頭を保ち、冷静な判断をすること。

自分を変えることに勇気を持ってない自分は、まだまだ残っています。ただ心は伝統、野球は創造的破壊と、以来考えています。高校生としての生活・勉学のあり方を踏まえ、私自身のちっぽけなプライド・こだわりなどドブに捨てて、選手とともに本質を求め続けたいと考えております。